

## 書評

### 渡邊淳也『コルシカ語基本文法』

東京 早美出版社 2017年

鈴木 信吾

著者は筑波大学大学院の准教授で、本学会の会員でもある。教育面ではフランス語学が主な担当のようであるが、言語学における研究分野は多岐にわたり、コルシカ語はそのほんの一角を成すものに過ぎない（「わたなべじゅんやウェブページ」<http://www.ne.jp/asahi/watanabe/junya/> 2018年3月27日参照）。本書の内容の主要部分は、タイトルが示すとおりであるが、コルシカの言語・方言に内容を絞った単行本で日本で出版されているものとしては、評者の知る限り、もう一つ、本学会の菅田茂昭元会長による『コルシカ語基礎語彙集』（東京 大学書林 2014）が存在するのみである。今回、これに加えて新たな文法書が上梓されたことにより、日本語を通じてコルシカ語を重層的に学ぶことができるようになったわけである。

この本の構成を見てみよう。最初の「文字と発音」（pp. 4-10）に続いて、主に品詞ごとの分類をもとに、本書の核心部分を成す文法事項がまとめられている（pp. 11-78）。そのあと「島内方言差」（pp. 79-81）についての概説があり、さらに「単語集」、「動詞活用表」、「文献案内」（pp. 83-115）が実質的な巻末を構成している。上で触れた『コルシカ語基礎語彙集』が基本語彙の収録を中心に、簡潔な文法説明を付随させているのとは対照的に、本書の方は、主眼となる基本文法の系統的な説明があったうえで、そこに使われた単語が補助的にリストアップされているという体裁なので、これら2つの書籍は互いに補い合う関係にある。こうした補完性を実現させたという点でも、今回の出版には意義深いものがある。

ここで断っておかなければならないのだが、評者はコルシカ語を学んだこともコルシカ島に足を踏み入れたこともない。したがって、今回、この書評を書くに当たっては、まさに「付け焼き刃」という表現がぴったりの状況のなかで、もっぱら本書と『コルシカ語基礎語彙集』とを頼りに、内容を検討せざるを得なかったことを付け加えておく。それでも、明らかに誤植だと思われる箇所がいくつか見つかった。たとえば、基数詞のリスト中（p. 20）、数字の40を表す *quaranta* に続く41の男性形だけが *quarentunu*（下線は評者、

以下同様)と、ここに限って母音字の e に置き換わってしまっている。同様に、絶対最上級をつくる接尾辞の語形変化中 (p. 37)、男性単数の -issimu に続く女性単数だけで s が 1 つ脱落し、-isima という特異な形になっている。さらに、強勢 (記号) の有無で弁別される si/si は、前者が動詞 esse 「(…で) ある」の直説法現在 2 人称単数 (pp. 51, 108)、後者が再帰代名詞 3 人称 (p. 74) であるが、Ùn si più un zitellu 「きみはもう子どもではない」 (p. 35) や ti si lavutu(a) 「きみはからだを洗った」 (p. 75) の si に強勢記号が振られていないのが気になる。前者は繫辞、後者は代名動詞の複合過去をつくる助動詞である (過去分詞 lavutu の下線部も -va- ではないだろうか)。他方、和文による説明中では、「-one, -ore, -osu までおわる 2 音節以上の単語」 (p. 7) や「[命令法の] noi に対する形 (そもに行なう行動への勧誘)」 (p. 67) のような誤植が見つかった。後者の下線部は「ともに」であろう。また、「spenghje 『ひろげる』」 (p. 70) の下線部には、「単語集」の p. 91 から察するに「消す」が入るべきである。いずれも、第 2 刷が出るときには訂正がなされていることを希望する。

コルシカ語は、単一の標準語をもつわけではなく、様々な方言が対等な規範性をもって並び立つという複雑な状況にあるが (p. 79)、本書は、北部と南部 (さらに極南部) に分けたうちの、とりわけ北部方言に照準を合わせたものだと言う。一口に北部方言と言っても、様々な地域の変種が考えられるだろうから、例文に (たとえば、それがどこで採取されたかにより) ある程度のばらつきが見られるのは致し方のないことなのかもしれない。しかし、本書で初めてコルシカ語に触れる読者のことを考えると、わざわざ一貫性に欠けた例をあげる必要はないであろう。その意味で、時に一貫性を欠く例が見つかるのは惜しむべきことである。

たとえば、p. 15 に形容詞の語尾変化表が示されているが、これにそぐわない用例が見つかることがある。時制の用語としてあがっている tempi sèmplice 「単純時制」や tempi compostu 「複合時制」 (p. 47) における形容詞 sèmplice, compostu は、変化表に従って男性複数 of the tempi 「時制」に一致させるのなら、それぞれ sèmplici, composti になるはずだし、また、[...] e ràdiche sò assai ùtile 「[ハンノキの] 根はたいへん便利である」 (p. 29) において繫辞でつながれた形容詞 ùtile も、女性複数 of the nomini 「根」に一致して ùtili となるはずである。

次に、p. 7 には、強勢音節にある母音字 e, o は (動詞が活用するなどして) 強勢を失う

際にそれぞれ i, u に交替するという記述があるが、p. 68 にあがっている *vene* 「来る」の命令法 1 人称複数 *venimu* と 2 人称複数 *venite* の下線の母音は、無強勢の音節にあるにもかかわらず、i と交替していない（一方、「動詞活用表」の p. 112 には交替のある *vinimu*, *vinite* の形が載っている）。P. 69 に *tumbà* 「殺す」の過去分詞としてあがっている *tumbu* についても同様で、下線の母音が強勢音節にあるのに o との交替が見られない（これに対して、受動態の例文のなかでは [...] *hè statu tombu* 「[いのししは] 殺された」(p. 74) と、母音交替した *tombu* という形が使われている）。

統語論の面では、p. 40 に、人間を表す名詞が直接目的補語として使われるときに限り前置詞 *à* 「(誰々) を」を伴うという説明があるが、これに加えて『*à*+ひと』を代名詞化するには、直接目的補語代名詞を使わず、『*à*+強勢形』とする」(p. 40) という説明が続き、その実例として *Petru chjama à ellu* 「ペトルは彼をよぶ」(loc. cit.) があげられている。この説明によれば、直接目的補語が人間を表す場合には（少なくとも 3 人称では）接語代名詞が使えず、上例中の *ellu* 「彼」のような自由な代名詞に頼らざるを得ないと読めるのだが、同じページ内の別の箇所にも *Da quellu ghjornu più nisunu l'hà vistu* 「その日からだれも彼を見かけない」という例文があり、その和訳から察するに *l'hà vistu* (に下線で示した 3 人称) の接語は人間を指しているように見える。表面上は矛盾するようにも見えるこうした揺れは、単一の標準語をもたないという点に要因が求められるのであろうか。

さて、本書が北部方言に準拠しているとは言え、特に音声や形態面などで他の方言中に北部方言と異なる点がある場合は、そうした点についての補足が随所に見られる。また、他のロマンス諸語（特にフランス語やイタリア語）との相違点や類似点も多くあがっている。これは理解の一助になってありがたい。書かれたコルシカ語を見ると標準イタリア語に近いようにも見えるが、音環境により強形と弱形のヴァリエントをもつ子音が（特に北部ではいくつも）あり、たとえば母音間で有声化するなどして弱形になるので (pp. 7-8)、話されたときに与える印象はイタリア語とはかなり違ったものになるはずである。これを確かめてみなければ、巻末にコルシカ語が聴取できるサイトの紹介もある (p. 115)。ページをめくっていくと、あちこちに囲み記事があって、コルシカの言語にとどまらず、文化や歴史など、様々な角度からこの島に関する知識が得られる仕組みになっている。「コルシカ学」に対する著者の並々ならぬ熱意に惜しめない拍手を送りたい。